

目次

- P1
今号の TOPICS
「社会貢献活動を振り返って」
- P2
2班 京都と現代文学
1班 私んちの「すずむし」
- P3
4班 あなたが恋しい・・・
3班 浄土への旅支度
- P4
「自然と文化科」創成期の思い出
リレー随筆「そば打ち」
- P5
特集「8期生1年後の思い出」
- P6
特集「8期生1年後の思い出」
- P7
特集「8期生1年後の思い出」
- P8
俳句サロン/絵手紙コーナー
絵画コーナー/工作同好会

◇自然と文化だより

神足石仏群の閻魔大王の前で聞いた話
命の迎えが来たら
還暦(六十)とんでもないよと追い返せ。
古希(七十)まだまだ早いとつっぱなせ。
喜寿(七十七)せくな老楽これからよ。
傘寿(八十)なんのまだまだ役に立つ。
米寿(八十八)もう少しお米を食べてから。
卒寿(九十)年齢に卒業はないはずよ。
白寿(九十九)百歳のお祝いが済むまでは。
茶寿(百八)まだまだお茶が飲みたらん。
皇寿(百十一)そろそろゆずるか日本一。
閻魔大王書記



今号の TOPICS

「社会貢献活動を振り返って」

社会貢献グループ専任幹事 岡田 進

私たちが駆け抜けてきた20世紀は、科学や経済が飛躍的に発展し、豊かな社会が実現してきました。私たちはその一助として活躍してきた現役生活を終えて、今までできなかった事にチャレンジしようと、シニア自然大学校とかかわられたのではないのでしょうか、その中で特筆すべきは素晴らしい仲間との出会いでした。

私たちは植物の不思議さ、美しさ、か弱さ、逞しさに感動してきました。もっと植物のことを知りたい、楽しみたい、また、古い文化に触れたい、ボランティア等に参加をして新たな感動に触れたいと思われたことでしょう。最近では、企業も社会構成の一員として社会貢献事業に取り組んでいるところが増えてきています。例えば、大阪ガス、清水建設、イオン等・・・

私たちが習得した知識をアウトプットするために今年の社会貢献グループでは、主に(財)大阪ガスグループ福祉財団のご協力を得て実施した自然観察教室(OG観察会)と鶴見自然教室(春・秋)に参加いたしました。我々が参加する多くのイベントは主に子供相手の事業ですが、このOG観察会の対象者はシルバーエイジの皆様方でした。

今年度最初の「長居植物園自然観察教室」は参加者がうまく集まらず中止となりましたが、その後の各自然観察教室のキャッチコピーは5月実施の「自然がいっぱいの万博日本庭園を楽しもう」、6月実施の「鶴見緑地の初夏を楽しもう」、9月実施の「長居植物園の初秋を楽しもう」、10月実施の「鶴見緑地の秋を楽しもう」、11月実施の「晩秋の渉成園を散策しよう」でした。

鶴見自然教室は、6月実施のテーマ「オナモミダーツとふじ等の維管束観察」11月実施のテーマ「オナモミダーツとミクロの世界を覗こう」の材料を収集して参加者に説明をしながら新たな発見をされたのではないのでしょうか、両日ともお天気に恵まれ楽しい一日を過ごしました。ご参加いただいたリーダーの延べ人数は114名になり、また、参加者の延べ人数は1438名でした。

科員の皆様のご協力によって、事業も無事に終了いたしました。感謝♪♪



セイバンモロシの



(工作同好会の
作品から)

京都と現代文学

2班 飯田 義宣

現役を去り、時間の余裕が出来、京都の史跡巡りをする中で、石碑など直接作家に関係するものを含めて、京都の文学に触れる機会があった。



地下鉄蹴上駅から南禅寺に向かう時に、今では、蹴上浄水場の中にある与謝野晶子と鉄幹とのロマンスの地である栗田の宿、華頂温泉で、軒を並べていた中

の一軒、明治34年1月早々に泊ったという「旅館辻野」のあとがある。晶子の歌集「夢之華」に「御目ざめの鐘は知恩院聖護院 いでて見たまへ紫の水」紫の水は鴨川あたりだろうか。ちょうど鉄幹(寛)が生まれた岡崎も眼下に一望できる。この歌を刻んだ石碑の場所が旅館の跡という。栗田の宿での密会以後、堰を切ったかのように歌を詠み始めたという。

祇園白川畔の「かにかくに」の歌碑。吉井勇の古稀を祝って、茶屋「大友」の跡に昭和30年11月8日除幕。歌集「酒はがひ」から「かにかくに祇園はこひし寝るときも枕のしたを水のながるる」布団を着て寝た姿の鞍馬石に吉井勇の自筆が刻まれたという。伯爵吉井友実の孫として生まれ、京の色街で放蕩三昧極まる生活。我々には想像すらできない世界。

森鷗外の「高瀬舟」。角倉了以が慶長16年に2年余をかけて開鑿したという運河。淀川を経て大阪まで通じている。当時は材木商や薪炭商が軒を並べ、木屋町の名を生む。遠島を申し渡された罪人を高瀬舟で大阪に護送する途次の話。伏見に向かう水路に入る。護送役の同心、羽田庄兵衛が、平静でいられるわけを喜助に尋ねる。「知足、と安楽死」、人間にとって永遠の問題を提起していると思う。

31歳で病死した「檸檬」の作者、梶井基次郎の二条通り寺町角。羅生門の芥川龍之介、高山樗牛の「滝口入道」。司馬遼太郎の壬生の八木邸を含む新撰組関連史跡。三島由紀夫の「金閣寺」水上勉の「五番町夕霧楼」。谷崎潤一郎の法然院の墓地「寂」。志賀直哉の住居跡。岡本綺堂の鳥辺山心中。鈴鹿野風呂の句碑。ジャンルは違うが、円山公園内の「祇園小唄」・知恩院下の真下飛泉の「戦友」・吉田山の「三高寮歌」の碑。まだまだ出会える作家がいる。誰かが京都は文学不毛の地と言ったそうだが、そうではなく魅力いっぱいの京都と言えろ。

私んちの「すずむし」

1班 坪井 都子

私の家にはもう6代も続く由緒正しい家族がいます。それは「すずむし」達。6代目は去年6月10日から孵化を始め、700余匹が誕生しました。最後の1匹すず子が死んだのが11月19日、ほぼ半年間私はその誕生から最後の1匹の死まで 見守り育てました。

たかが すずむし されど すずむし

楕円形の2mm程の卵から同じ大きさの1令幼虫が生まれます。一人前に体長の1.5倍もの長い触角を揺らしているのを虫眼鏡で確認して初めてすずむしの赤ちゃんが今年もぶじ誕生したと喜んでます。鈴虫マットの上を もじょもじょまさに虫が湧いたという感じ。この時期はただ潰さないように気を遣います。4令幼虫まで脱皮を繰り返して成虫になります。7月末に入るとオスは羽が平たくなり、メスは産卵管が伸びてきて雌雄の区別がつきだします。この頃から希望の皆さんの所に養子に出します。リ〜ンリ〜ンと美しい音色を響かせてくれるように…。(裏話;オスの中にはライバルに蹴りを入れて場所を取り、そこで鳴くという性格の悪〜い奴もいます。)

今回は家に150匹ほど残しました。お盆頃、素晴らしい大合唱です。何と12匹のオスが一斉に上げた羽を真剣に震わせていました!! 食事はスズムシ用の主食の餌とウリ類、満腹になるまで餌場から離れません。自分の好きな居場所は好みによって違います。人気第一は炭の上、そして草や地べたのマット。そこで寛ぎながらそれぞれ日常のお手入れをしています。左右の立派な触角や羽を1つずつ丁寧に口で擦っています。

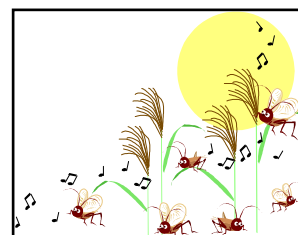
交尾がぶじ終わるとオスは儂く弱々しくなり、最後を迎えます。メスは餌を食べまくりパンパンのお腹になり産卵します。メス達も最後のお役目も終わると、穏やかで静かな毎日……。

10.10 メスばかり30匹ほど。

11.08 1匹きになる。「すず子」と名付ける。

11.19 大往生。まるで生きているような姿のままでした。

最後まで凛と生き抜いた「すず子」達へ、
あなたたちの子どもは、私がしっかり守り育てます。
今年もありがとうね



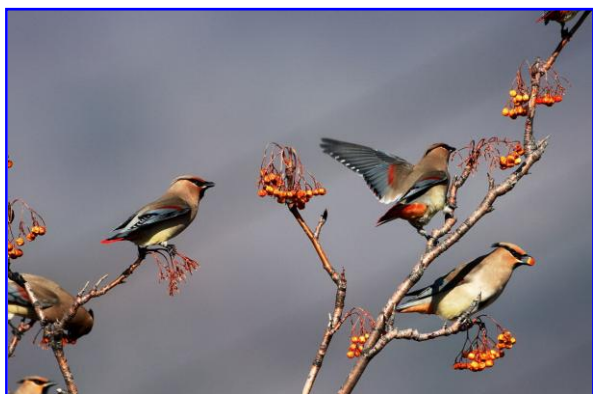
あなたが恋しい・・・

4 班 八木橋 佐知子

我が家にトウネズミモチの木がある。植えた覚えはなく、いつからか勝手に生えてきた。ブロック塀のそばだから、そこに止まった鳥がたまたま種を落として芽生えたのだろう。何の木かなあと思っているうちにどんどん大きくなって、いまでは屋根よりはるかに高く伸び、枝をおおきく広げている。すすけた古い家のボロ隠しにはなっているので、「ま、いいか」と思って切らずにおいている。いつもはヒヨドリがやってきてさわがしく実をついばみ、食べ残しが地面におちて掃除がやっかいだった。今年はまた黒い実が大豊作でたわわに実った。去年の猛暑の影響かもしれない。ところが先日、ヒヨドリとはどうも少し違う鳥がやってきた。アレッ頭の先がとがっている。やや太り気味だ。尾羽があかい・・・「もしかして」と慌てて家の中から双眼鏡をとりだして見ると「やっぱり」ヒレンジャクだ。ヒレンジャクは奈良公園のヤドリギに來ているのを見たことがある。しかも一度きりの出会い。辺りを見回すと「なんと！」20羽ほどの群れが傍の電線に止まっているではないか「ヒャー」その後、電線に止まるヒレンジャクは最高30羽となった。そして、電線とトウネズミモチをいったり来たりして3日間いた。やがてトウネズミモチの黒い実はひとつ残らず食べつくされ、分厚い大きなはっぱの隙間に赤っぽい果柄だけがまだまだ寒い2月の風に吹かれている。

そして、それっきり彼らは姿を消した。
どこへ行ったのヒレンジャク。
私はまだあなたとの楽しかった日々が忘れられない。
ちょいワルおやじのように、シャイで強面のあなたの風貌が、いまは恋しい・・・

(緋連雀(ヒレンジャク)が群れで飛んでいた)



浄土への旅支度

3班 堀川 豊司

先日の宇田成徳氏の講演の中に「親孝行論」がありましたが、最近私なりに敬服させられたこととお話します。

昨年、家内が腰痛治療のため手術日の7日前に入院しましたが、その際に同室したご高齢のS女は、股関節障害での独力歩行困難と白内障の眼科治療のため、約3ヶ月前から入院の先輩です。その方と親孝行な息子夫婦のお話です。

S女の毎食時には、必ず息子夫婦のどちらかが付き添い、その優しい表情での対応が、また同室者に対しする気配りもすばらしく、同室者に明るい雰囲気醸成し、私にはとうてい真似の出来ない振る舞いでした。家内の手術後にも、替わった病室へ度々見舞いにみえ、付き添う私にもアテ付きのビールの差し入れさえありました。

素直なS女は、術後のリハビリにも精を出し、日々効果を挙げ、廊下そして病院周辺での歩行訓練もいつも嬉しそうにニコニコしながら、その後ろには必ず息子さんが付き添っておられた。独りで歩けることで、あれもしたい、これもしたいと明日に向かって大きな夢に膨らませておられたであろう。そして待ちに待った退院の挨拶にお見えになった。

家内が退院日を気にしだした頃、S女の息子さんがお見えになった。早速、S女の活躍振りを伺うと、涙ながら実は昨日、忌明けの法事を終えたとの事であった。何でも退院日は、退院に伴う諸々の緊張と入院からの解放感などで疲れたとして、風呂に入らず就眠されたとのことでありました。夜中ふと気がつくと浴室の灯りが煌々と、覗くとS女が湯槽でぐったり、水はあまり飲むことなく、安らかな表情だったと。結果的には自分で出来る喜びが裏目に出てしまい、退院後の明日を迎えることが出来なかった。

私は、S女の今までの永い間の入院治療は何だったのか、無意味であったのか？と思ったその瞬間、いや、今まで独りでは出来なかったことが、出来る喜びを胸に秘めての大往生。そして息子夫婦の無償の親孝行に、私にはさすがに胸打つものがありました。

今S女は嬉しそうにニコニコしながら、良くなった眼であつち見、こっち見しながら確実に浄土へ向かって、しっかりした足取りで歩いておられるでしょう。

無償の親孝行の行為に対し、母親として気持ち良く世話の掛からない「あの世」への旅立ちが、息子夫婦への謝恩の行為とも思えてならない。 合掌

「自然と文化科」誕生の思い出

「自然と文化科」創成期の思い出

高井 茂光

自然と文化;科は平成16年に高等科一期生6名・二期生14名でスタートした。二期生が中心となり、一期生に参加を呼び掛けて発足した科です。

「自然の中で育まれ、自然と共生してきた日本の文化は、都市化し自然と断絶した現代の生活の中で大きく変容しようとしている。これらについての現状と問題点を認識し、人と自然の共生の在り方を考え、提言する。」という崇高な狙いをもって船出した。

初年度から公開講座・野外観察会を実施し 観察会は観察地に近い人が夫々担当した。講座生を対象とした観察会や植生調査も行った。フィールドは大阪城公園で箕面公園となったのは二年目からです。研修旅行も3月に一泊で但馬路の巨木とザゼンソウを訪ねる旅をしている。

発足時のことを振り返る時どうしても避けて通れないのが 野外観察時の事故です。

年が明けた最初の活動日 白幡池で野鳥観察をした帰りの谷沿いの下り勾配の道で事故は起きた。コンクリート舗装された道で路面に砂利が散らばっていて滑り易い状態であったのを覚えている。滑るなよ!と注意し合って歩いていた時 うしろのほうで;落ちた!;と叫ぶ声が聞こえた。次の瞬間;どすん;と鈍い音がした。谷を覗くと切り立った崖で はっきりとはしないが深さは数m以上はあったと思う。何人かが急な崖をかけ降り 救急車!救急車!と叫んだ。それに応じて 消防署に連絡する者 消防車を誘導するために道に出る者 自宅に連絡をとる者など分担した。Iさんと私は自宅に連絡をする役を引き受け 白幡池の事務所まで走って行き必死に電話をかけたことを今も鮮明に思い出します。その時の私は落下場所しか見ておらず その状況から最悪の事態を想定していた様な気がします。

救助はレスキュー隊が・・記憶に間違いがなければ・・一個隊では足りず2個隊が駆けつけてやっと引き上げてくれた。後日消防にお礼に行った者の報告では あそこで落ちてよくあの程度ですんだと言われたそうです。

事故が起きるとはとても思われないところでの事故です。その後事故がないことをよしとせず いっどこでも事故は起きる という気持ちを常に持って行動することが大切である。

つくづくそう思います。

リレー随筆

そば打ち

岡田純子

高等科お別れ会の折、そば打ちを楽しんでいるという牧野さん(前代表)、益田さんなどから話を聞きました。ぜひ食させて欲しいと、八幡四季彩館を訪れたのが、そばの道に迷い込んだ始まりでした。

打ち立ての蕎麦の香り、味の美味しさを知りました。今までの食卓に登場した蕎麦はソバではないと思ってしまったのでした。しかし、なかなか蕎麦の道は遠く、食すに値する物を作るには2～3年の時が必要でした。やっと喉越しの美味しい蕎麦が打てるようになりました。

蕎麦打ちには温度、湿度の変化に注意する集中力と手、足、腰を使う体力が要り、よい運動にもなります。蕎麦をおいしく食べるためには、冷たい清水が必要で、生の蕎麦を熱湯でゆで、直ちに冷水にさらし蕎麦を引き締めた後、熱い蕎麦、ザル蕎麦にと作っていきます。この水、日本の食文化と大きく関わっています。学生の頃、東京で、初めて汁蕎麦を口にしたときから、二度と東京で汁蕎麦を食べる気にはなりません。醤油辛く真っ黒な汁は、関西の薄味で、美味しいだし汁の良く利いたものとは天地の差で、その後はザル蕎麦しか食べることができませんでした。

関西のだし汁の文化の元は、太閤さんと徳川様にあるのです。秀吉は大阪城を中心に堀川を廻らし、流通に力を注ぎました。一方、お江戸では神田上水、玉川上水と、当時では世界でも類のない上水道を作りました。取水口のある多摩川上流付近では厳しい掟があり、野壺など不浄なものは厳禁されたほどでした。このことが、お江戸では清水でさらしたザル蕎麦が食され、大阪では水に不安があるので、熱湯でさらした熱蕎麦で振舞われ、出しの美味しい温蕎麦が、出しの文化を創ったともいえましょう。

1年を振り返って

2班 笹井 宏悦

植物観察や調査に参加し、ガイドが出来る機会が得られればと思い「自然と文化科」へ入りましたが、小々気力不足の所為か他業務？の影響か、両立出来ないまま1年が過ぎてしまった。けれども、初めて行った武田尾や箕面での調査と観察、また金剛山や信貴山など多くの場所での観察会、そして万博公園。

これらでの樹木に関する知識を習得することが出来たのは講師の皆さんのお陰だと感謝しています。観察会に参加したうち、特に金剛山での樹木観察には、小々熱が入った。というのは金剛山へは十数年前から殆んど単独で登山を続けていますが、この1年位前から何冊かの重い植物図鑑を持って「ちはや園地」や「展望台付近」の樹木観察と同定をやり始めたからです。もちろん一人では同定が出来ない樹木が多く有りますが自分でじっくり観察をして同定が出来た時は大変嬉しく感動さえ覚えます。

最近では(2月)転法輪寺横に有る積雪した「ノリウツギ」やミュージアム付近の「ジングウツツジ」等です。また、風雪に耐えている「メタセコイア」と対比する常緑の「ヒノキ・スギ林」達を観ていると木々の生命力が感じられ、逆に「自分が励まされているような思いになりました。



雪中の樹木の枝を眺めていると、普段は余り見られない枝も良く見え、その枝ぶりがよく観察できた。特に、樹氷の時は曲線的に見ええて美しい！

これからも、春夏秋冬の金剛山の樹木観察を続けてみていつの日か樹木と対話出来ることを夢みています。



センテナリアン

4班 尾崎 和子

最近「センテナリアン」という言葉に興味を持ち、ネットで調べてみると、100歳以上の長寿者のことで、百寿者と呼ばれているということを知りました。ついに関連する記事にもいくつかアクセスしてみました。

日本は世界一の超高齢社会を迎えようとしている中で、100歳以上の人口も年々増加し、しかも身体的に人の手を借りずに自分で基本的な生活ができる元気なセンテナリアンが増えてきている。

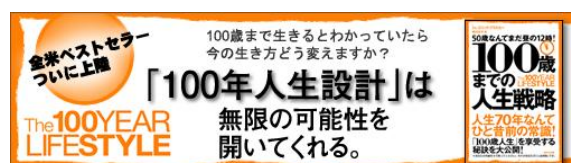
そんなセンテナリアンを対象に多くの研究がなされ、アンチエイジングの成功例として、見習うべきライフスタイル、特徴などが調査されている。

長寿に関係する要因には、食事、遺伝、環境、性格等々。中には、血液型(B型人口に対し相対的にB型の百寿者が多い)や「耳の大きい人。耳をつくっているのは軟骨—軟骨を合成する力が強い人＝変形性関節症になりにくい＝活動的な人＝元気で長生き」などの報告例もあった。

特に、遺伝子によって決定される寿命を全うするのは、老化のプロセスを遅らせる食事にかかっている。活性酸素の発生を少なくし、カロリーをコントロールしながら、必要な栄養をバランスよく取るという、食事を重要視する記事が多かったのですが、それとは逆の記事もありました。

食事はあまり関係なく(食事や嗜好は個々別々)、元気なセンテナリアンに共通する4つの共通項は:1楽観的性格、2趣味や専心するものがある、3スポーツなどの身体的運動。4失うことに対する適応能力。特に、4番目の喪失について、知力、視聴覚などの身体能力、経済力、気力や精神力などの低下。当然100歳にもなると、子供や孫などの身内、親しい友人などを無くすことは大変悲しくつらい。この喪失感の積み重ねがストレスとなるが、ストレスに適応、順応でき、克服できることが長寿の秘訣である。

私は最後の記事に大変共感しています。



「早かった1年間・自然と文化科に入会して」

3班 壺三 文作

昨年の3月、高等科卒業をひかえ、その後の進路をどうするかと考えていた時に、武田尾での植物観察会に参加しました。武田尾には行ったことがないところでした。正直冷やかし半分の気持ちで参加したのが、自然と文化科との接点でした。

自然と文化科の最初の印象は「和やかな雰囲気の研究科だなあ」と感じました。参加するに当たりどんな研究科だろうかと不安でしたが、私以外にも数名の高等科同期の方々も参加しており安心しました。

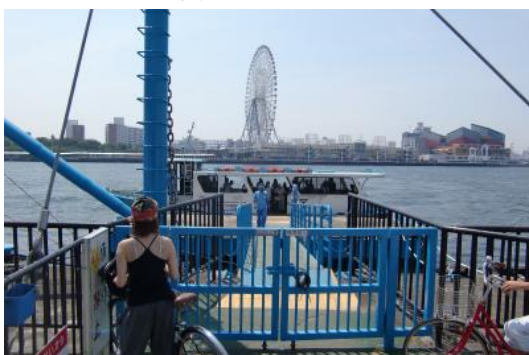
4月の総会に参加し、入会者の数の多さに驚いたものです。4班構成で1班に21人も・・・昨年から入っている「森と海の自然科」の全研究科員より多いのです。班活動、調査、社会貢献、観察・・・とはじめは何のことやらわからないことばかり、正直これはしまった間違ったと思ったものです。おまけに班長をしなければならぬ羽目にまで陥ってしまった。抜け出したい気持ちがありましたが、何とか乗り越えて・・・成るようにしなければならぬものだろうと気持ちを切り替えたのです。

先日の例会で広報の方から突然、次回の広報に8期の方の思い出を記載したいので書いてくださいと原稿依頼をお願いされてしまい、原稿を書くことになってしまったのです。

この1年、自然と文化科に入会しての思い出は沢山ありますが、一番印象に残っているのは、渡船巡りです。異常なぐらい暑かった昨年の7月に、班で渡船巡りをしました。班活動なので、班長が責任を持つてすることになりました。市内のことをよく知りませんどこに行けばよいのやら、インターネットで検索するやら・・・さあ大変です。下見も2度ほど行いました。暑かったです。こんな暑い日を選んでと誰を恨むでもなし・・・一人で渡船巡りをしたことが一番の思い出です。

当日は、下見をしたその成果が発揮できたことがうれしかった。下見の大切さを学んだものです。

天保山への渡船乗り場より



「耕さず、肥料・農薬を用いず、草や虫を敵としな

い」自然農

3班 柳生 和嘉

家庭菜園はブームというより最早リタイヤ組の必須アイテムとなっているほど盛んな趣味である。野菜が成長する喜び、収穫の喜び、近隣の同好の士との語らい、それに自分が作った素姓のわかった安全な野菜も大きな魅力である。その為農薬は使わない、化学肥料は使わないと固く誓って始めた菜園も、虫が食って葉っぱが無くなるのを見ると幼苗期だけなら薬の散布も少々ならと悪い心が言い始める。隣の菜園の作物と比べて成長が悪いと現役時代の競争心がもたげ、即効性の化学肥料を使いたくなる。

さて、野菜栽培には常に農薬問題がついてまわるが、同じ植物でも山の植物は虫や病気ですべて枯れて丸裸になることはない。何故だろうか。この違いを理解して山の植物と同じように野菜を栽培すれば無農薬・無肥料の安全・安心な野菜栽培ができる事になる。

山では落葉が長年に亘り積み重なり、これらが微生物や小動物により分解され、必要に応じて徐々に地中に取り込まれ養分として働く。決して耕しはされていない。植物は光合成をしながら他の植物と淘汰を繰り返しながら大きくなり、負けた植物の根は地中で腐食し有機物を地中に残していく。太陽の恵みと地上、地中の循環型作用で好環境を作るわけで、まさに生物多様性の世界が植物栽培の好環境と言えるわけである。

自然農は、表題の「耕さず、肥料・農薬を用いず、草や虫を敵としない」の通り、最初に畝を作ったのちは耕すことはしない。種まきや苗の定植の時は表面の草を刈り取り、必要な所だけ草の根を削り取るだけ。作物が草に負けない程度に草を刈りながら収穫を待つだけです。

こんな話は切りがありません。箕面公園を北に越えた標高 450mの地、高山右近生誕の地の棚田(2500m2)で楽しんでいますので見学ご希望の方は連絡下さい。

この春は、天候不順で野菜が高騰し、工場野菜が価格が安定した清浄野菜と有名になりました。太陽の恵みや微生物などの生物多様性の恩恵を受けない物を食物として良いのだろうか疑問を持っています。

イチョウのあれこれ

1班 小島 伸之

念願の福井県立恐竜博物館に正月明け出かけてきました。青春18切符で福井駅に着き、えちぜん鉄道で勝山駅下車、コミュニティバスに乗り約15分で到着します。それは想像をはるかに超えたでかい博物館でビックリしました。4,500㎡という広大な展示室に、40体の恐竜骨格や多数の標本を見ることができます。

私は恐竜もさることながら、その時代にどんな植物が生えていたか興味を持ちました。



いろいろ目にする珍しいものは素通りし、今も生き延びているものは無いか見ていくうちにありました。それは「生きている化石」と言われているイチョウです。

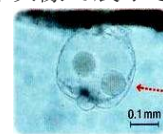
イチョウの仲間は3、4億年前に出現し、2億5千万年くらい前から世界中に栄えて種類も多くなったと言われています。これは古生代の末期ペルム紀であり、その後の中生代三畳紀、恐竜の栄えたジュラ紀、白亜紀に最も栄えていたようです。厳しい氷河期も生き残り、現在では1種のみ中国に残っていたと文献に出ています。日本には古くに渡来し、江戸時代18世紀にヨーロッパ各地、アメリカに紹介され広がったようです。リンネも一枝を入手し、ゲーテも著書にイチョウを記述しています。

このイチョウで世界の植物学者を驚倒させた大発見をしたのが平瀬作五郎氏です。因みにもう一つ世界に衝撃を与えたのは皆さん良くご存知の三木茂博士のメタセコイアの発見でした。

平瀬氏に関しては天皇陛下が2007年5月29日(火)(ロンドン・リンネ協会)に基調講演で述べられています。「19世紀における日本人の学問上の業績としてあげられるのは、1896年の平瀬作五郎によるイチョウの精子の発見であります。平瀬作五郎は東京大学植物学教室に画工として勤め、後に助手となった人ですが、イチョウの精子が泳ぎ出すことを観察し、論文にして植物学雑誌に発表しました。この一月後、平瀬作五郎の研究に協力した東京大学農科大学助教授池野成一郎がソテツの精子発見を同じく植物学雑誌に報じています。シダ植物に精子があることは知られていましたが、裸子植物に精子があることが見出されたのは世界で初めてのことです。この発見は当初は

信じられず、翌年の1897年アメリカで同じソテツ科のザミアで精子が見出されてからこの事実が信じられるようになりました。この業績により、二人は1912年、学士院恩賜賞を受けました。イチョウは中生代ジュラ紀に最も栄えましたが、その後中国だけに残った一目一科一属一種の、系統上独特の裸子植物です。古く中国から日本に移され、リンネによってケンペルの図を元に学名がつけられました。平瀬作五郎の研究したイチョウは今も東京大学の小石川植物園にあり、昨年小石川植物園を皇后と訪れ、当時の研究に思いをいたし、そのイチョウを見て来ました。」(2007年6月14日 読売新聞)

何とこのイチョウの精子が動く映像で展示されていました。



福井県立恐竜博物館 啓林館 生物Ⅱ

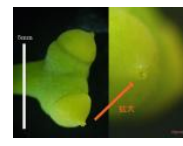
勿論イチョウは雌雄異株であり、雄木の短枝に咲いた雄花(5月初め頃)から風に飛んだ花粉が、雌木の雌花の胚珠の先端にある珠孔液に付き、胚珠の中に取り込まれ、花粉管の中で精子が作られ、9月頃に花粉管から出て卵細胞まで泳いで受精する。この泳ぐ精子を発見したことは世界で初めてであり実に感動的なことだった訳です。



雄花



雌花



雌花の拡大

(奈良教育大学の植物図鑑より)

平瀬作五郎氏が第2回恩賜賞を受賞されたことは胸にジンとくる秘話があります。始めは平瀬氏の上司である池野誠一郎助教授(当時)に打診がありました。池野氏が平瀬さんはどうされたか聞いたところ、平瀬氏には賞を考えていないといわれ、それなら自分もいらないと断りました。平瀬氏が学歴などないため偏見で見られていたことが分かります。平瀬氏の世界的な業績にやっかみもあったようで、受賞後1年で東大を離れます。

イチョウが昔から神社仏閣に多く、大木なのは、火災に遭った時、幹から水を噴き出し防火樹となるからです。また気根である乳が伸びるのは雄木に多いそうです。

最後に東京シネマ新社「イチョウの精子と植物の生殖進化」35分間の科学映像をパソコンからネットで検索し、無料で見られますのでお勧めします。

俳句サロン
コーナー

松平 吉生

枯蘆に日の射してゐる坐忘かな
今朝の雪文に言ふなり兼好忌
一木一草すべて俳諧山笑ふ
しゅんしゅんと鉄瓶の沸く春障子
海光や花びら淡く水仙花
生きゆるむわれに椿の一途かな

牧野 能子

蠟梅のかおりに寄せてはむ我
今年また飾ってみたる雛人形
つくし摘むひだまりの中団らんす

山上 恵子

鬼は旅家族ことしは豆まかず
春や今青ランドセル色映えて
- 長島「なばなの里」の
イルミネーション見物 -
七色に雪照らしゆくダイオード
赤富士を写メールにして冴ゆる月
洪水の光なばなに海豚飛ぶ

大森 美子

- 尾鷲にて -
春うらら柱状節理や水平線
うららかな陽差しをあびて巡航船
落の薑春の香りやほろ苦さ

三浦 節子

可愛いと 雛抱く孫の いとしけれ
雛あられ 口いっぱい 孫である

谷坂 修二

裸樹（はだかぎ）の電飾ビルを紅く裂く
谷道に星降るごとくタマミズキ
肚を締め帯も正して寒稽古
新雪を一筋に切る斜滑降
龍が噴く火の粉顔焼くどんどかな



絵手紙
コーナー



(宮阪 信次)



(中川 恵美)

絵画
コーナー



工作同好会
コーナー

(12月:クリスマスグッズ) (1月:ペーパークラフト)



自然と文化だより

皆様のご協力により8号が発行出来ました。
今年度、5号から8号まで発行できました。
楽しい思い出の「自然と文化だより」を目指して
来年度も頑張りますので、皆さんの協力を期待
しています (広報一同より)